様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０３１６

研究課題名（和文）元代後半期における大都発展史の研究

研究課題名（英文）Study of Dadu history in the Late Yuan dynasty

研究代表者
渡辺　健哉（WATANABE, KENYA）

東北大学・文学研究科・研究員

研究者番号：６０４１９９８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、元代の都である大都（現在の北京）がどのように発展していくのかについての検討を行った。まず、大都の東部である斉化門（現在の朝陽門）を中心とする地区の発展について考察した。次いで大都と通州を結ぶ通恵河の開削工事とその運用、そして明代での改修工事の実態について検討した。以上の検討により、完成した大都が元代中期から後期にかけてどのように発展したのかが明らかになった。加えて、この大都の明清北京城に継承された部分とされなかった部分とが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study considered how Dadu(now Beiging), which is capital of Yuan dynasty, was developing. First, it was considered about development Qihua gate(now Chaoyangmen) district, which is in the east area in Dadu. Next, I considered that the excavation construction of Tonghui Canal, from Tongzhou directly into Dadu,and the repair construction in Ming period. It has become clear how Dadu developed between the middle and the late Yuan dynasty. Further, It has become clear what was inherited and what wasn't from Dadu to Ming and Qing dynasty.

研究分野：人文学

キーワード：元代　大都　北京　通恵河

１．研究開始当初の背景

13-14 世紀にユーラシアを支配したモンゴル時代史研究の進展が指摘されて久しい。数多くの研究者が様々な視角からこの時代の実態の解明に取り組みつつある。

このような状況のもと、研究代表者は元朝の都である大都に注目して研究を進めてきた。大都は現在の北京の直接の前身にあたる。

これまでの大都に関する研究の到達点として、陳高華『元大都』（北京出版社,1982 年）が広く知られているが、近年の研究成果や、大型叢書類の出版に伴う文献史料の完備によって、修正すべき箇所、また新たに判明した箇所が存在する。史料を改めて精査し、さらに新出の史料・資料から得られる成果を加えれば、これまでの研究を大きく凌駕することになると考えた。

研究代表者は、大都がどのように形成されていくのか、時間軸を意識しながら動態的な視点を意識してこれまで考察を加えてきた。これまでの国内・国外の大都研究が、成立年代やそれが記された背景に注意を払うことなく諸史料をひとしなみに扱い、大都形成の歴史的推移に注目して論じることが少なかったからである。

元代以前の金代の都である中都が元代になってどのように運用されてきたのかについて明らかにしたことを嚆矢とし、大都の建設に携わった人間とそれを担った部局について、大都の宮殿建築の建設過程について、大都における仏寺・道観の建設状況について、そして大都にどのような形で江南からの物資がもたらされたのかについて、それぞれ考察を加えてきた。以上の研究によって、元代初期の大都についてはある程度明らかにすることができた。この成果を踏まえて本研究課題では、元代後半期の大都の解明に取り組むこととした。

２．研究の目的

本研究ではこれまでの先行研究と研究代表者の研究を踏まえて、元代後半期の大都の状況がいかなるものであるか、そしてそれがどのように明代北京につながっていくのかについて明らかにすることを目的とした。

具体的には、大都全体を考察するのではなく、大都の東部に着目して、その開発と運河の運用について解明した。大都の東部とは元代の斉化門周辺のことで、ここは現在の北京市でいえば、朝陽門から東嶽廟にかけての地区に該当する。ここは大都への陸路の終着地でもあったため、東嶽廟では廟会とよばれる定期市が催され、多くの人が集まった。この地区を分析することで、大都が元代中期においてどのように発展したのかを明らかにする。

一方で、通州と大都を結ぶ運河である通恵河に注目した。通恵河については、元初の開削工事について触れた研究が存在し、研究代表者もかつて言及したことがある。しかしながら、その後どのように運営されているのかといった研究は存在しない。明代に入っても改修に関する議論が行われていたことから、機能していたか否かは別にして、通恵河は確実に存在していた。通恵河に注目しつつ、元代後半から明代前半までの北京地区への物流の具体的状況を明らかにする。

以上のような陸路と運河による物流をてがかりに、元代後半期の大都の状況を明らかにすることを目指した。

こうした点の解明を目標に据え、さらに加えて以下の点についての展望を示したい。

本研究と研究代表者のこれまでの研究と合わせて、大都の特質を抽出し、中国の歴代の都城の系譜上に大都を位置づけ直したい。これまで中国の都城といえば、長安が代表的都城として挙げられてきた。唐の長安に限っていえば、豊富な研究蓄積を誇っているものの、一方で中国近世の都城についての研究が手薄であることはつとに指摘されている。ようやく近年になって、北宋の開封や南宋の臨安、明代の北京・南京の研究が進展してきた。本研究の進展によって、宋と明に挟まれた元の大都の状況が明らかになり、近世中国の都城が通観できるようになるであろう。その上で日本の都城やイスラム都市と比較した議論が可能になっていくに違いない。大都を軸に近世中国の都城を俯瞰できるようにしたい。

３．研究の方法

以上のことを明らかにするにあたって、文献史料による分析を第一に据えつつ、実際に対象となる地区を踏査し、石刻資料の調査をはじめとした現地調査も並行して行うこととした。すでに研究代表者は北京調査を度々行っている。そのため調査は効率よく行うことができた。本研究ではとくに文献調査を踏まえたうえでの通恵河の踏査と通州の調査、そして東嶽廟近辺の調査を行った。通恵河については可能な限り徒歩での調査を行った。斉化門・東嶽廟がある大都東部についてはその周囲をも含めた形で踏査した。また、石刻資料については、近刊の『北京元代史跡図志』（北京燕山出版社,2009 年）を手掛かりに調査を行った。

（１）文献史料の整理

『元史』『元典章』『通制条格』といった官撰史料はもとより、『道園学古録』に代表される個人文集のみならず、東北大学附属図書館に所蔵される大型叢書『四庫全書』『続修四庫全書』『四庫全書存目叢書』『四庫未収書輯刊』『北京図書館古籍珍本叢刊』『天一閣蔵明代方志選刊』『天一閣蔵明代方志選刊続編』等に収録されている元・明・清人の個人文集や地方志から関係史料の蒐集を行った。明代

に関しては、『明実録』『皇明條法事類纂』等の公的編纂史料から関連記事を収集・整理した。以前よりも史料・資料の閲覧環境が好転したため、かつての研究に比してはるかに豊かな成果を手に入れることができた。

（２）石刻資料の整理

石刻資料については『遼金元石刻文献全編』（北京図書館出版社,2003 年）や『北京元代史跡図志』（北京燕山出版社,2009 年）等に収録されているもの、また典籍に収録されているものの分析を行いつつ、『北京古建筑地図（上）（中）（下）』（清華大学出版社,2009 年）にもとづき、現地で確認できるものに関しては実見を行った。

（３）現地調査

本課題の研究期間内に、３回の現地調査を行った。とくに通恵河の現地踏査と関連する石刻資料の調査、そして国家図書館・北京大学附属図書館で文献調査を行った。

①2012 年 08 月 13 日～30 日

北京市内にある国家図書館での文献資料の調査、及び北京西郊の香山から東郊の通州にいたる河道の踏査を行った。

②2013 年 12 月 19 日～24 日

前年は夏の調査であったので、冬の調査を行うためにこの時期に行った。結氷する通恵河の踏査（特に朝陽区）、及び国家図書館・北京大学附属図書館で文献資料の調査を行った。

③2014 年 08 月 19 日～29 日

引き続き通恵河の踏査を行うとともに、大都との比較を考えて、元の上都（内モンゴル自治区正藍旗）と元の中都（河北省張北県）の調査を行った。大都の発掘が事実上不可能であるため、大都との比較という視点から、上都・中都の宮城・皇城、そして外城の踏査を行った。この踏査によって、これまでの先行研究の誤りも確認できたので、この点を論文として公表できる目途がたった。北京市内では国家図書館において関連文献の閲覧を行い、そのなかから関連史料の収集と整理を行った。

４．研究成果

（１）大都の東部の開発

拙稿でもしばしば言及してきたように、金代の中都が元代も西南部に存在したため、それにより大都は南側から北側に向かって開発が進むことになった。加えて物資は東側から城内に向かってくるため、大都は東部が発展した。特に道観の東嶽廟を中心とする地区に注目し、そこがどのように発展したのかについて検討した。東嶽廟に注目した関係から、大都における宗教空間にまで視野を広げ、こうしたものの展開が都市の開発に影響を及ぼしたことが明らかになった（学会発表④）

（２）大都への物流

大都へどのように物資が供給されたのかを探るため、陸路と水運に注目して検討を加えた。とくに水運については通恵河の開削から元代を通じてどのように運用されたのか、そしてどれが明代になってどのようになったのかを解明した。特に『元史』河渠志、『経世大典』（『羅氏雪堂叢書遺珍』中華全国図書館文献縮微複製中心,2001 年所収）の逸文を中心に分析を加えた（学会発表②・③）。

（３）大都から明清北京城へ

通恵河に注目し、元代後半期から明代中期までどのような形で運用されたのかについて検討を加えることで、明清北京城と敬称関係を探った。ここでは、明代の成化 8 年と 10 年の会試の策問（『北京図書館古籍珍本叢刊』書目文献出版社,1988 年、及び『天一閣蔵明代科挙録選刊・会試録』寧波出版社,2007 年に収録）に注目し、これが当時の社会問題と化しつつあった通恵河の修理と関わることを明らかにし、そこから遡及して明代初期の通恵河の状況を考察し、元明交替期の連続面と不連続面について、通恵河を通して明らかにした（学会発表②・③）。

（４）北京史のなかの元の大都

今回の研究を通して、大都の特徴をある程度抽出することができた。次の段階として、その前後の時代である遼代や金代、そして明代北京の史料を相対的に検討することが可能になり、元の大都を北京史の中に位置づけ直すことができた（雑誌論文①、学会発表⑤⑥、図書①）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①：<u>渡辺健哉</u>、金の中都から元の大都へ、『中国――社会と文化』、第 27 号、2012 年、8-28 頁、査読有

②：櫻井智美・<u>渡辺健哉</u>、「元代国家与社会国際学術研討会」参加記（速報）、『13,14 世紀東アジア史料通信』、第 17 号、2012 年、15-22 頁、査読無

③：<u>渡辺健哉</u>、書評　飯山知保『金元時代の華北社会と科挙制度――もう一つの「士人層」――』、『東洋史研究』第 71 巻第 3 号、2013 年、106-116 頁、査読有

〔学会発表〕（計６件）

①：<u>渡辺健哉</u>、《経世大典輯本》中元代科挙礼儀的相関史料、元代国家与社会国際学術研討会、2012 年 8 月 25 日、天津市（中華人民共和国）

②：<u>渡辺健哉</u>、元末明初の北京地区における交通路の整備、応用科挙史学研究会（第 13 回研究集会「明代の政治・経済と科挙」）、2013

年 3 月 29 日、東北大学（宮城県仙台市）
③：渡辺健哉、元・明代における北京～通州間の交通路、第 46 回東洋史学研究会、2013 年 11 月 16 日、福岡大学（福岡県福岡市）
④：渡辺健哉、元の大都における宗教空間、日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」総括シンポジウム／大阪市立大学文学部創設 60 周年記念「東アジア都市における集団とネットワーク――伝統都市から近現代都市への文化的転回」、2013 年 12 月 06 日、大阪市立大学（大阪府大阪市）
⑤渡辺健哉、遼・金代の陪京、第 166 回宋代史談話会、2014 年 4 月 26 日、大阪市立大学（大阪府大阪市）
⑥渡辺健哉、金・元時代の複都について、満族史研究会第 29 回大会、2014 年 5 月 31 日、東北大学（宮城県仙台市）

〔図書〕（計２件）
①：荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉〔編〕『アジア遊学　契丹［遼］と 10～12 世紀の東部ユーラシア』勉誠出版、288 頁（146-155,221-231※ただし、前者は阿南ヴァージニア史代と共著、後者は董新林論文の翻訳）、2013 年
②：新宮学〔編〕渡辺健哉ほか９名共著『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社、316 頁（139-158）、 2014 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
渡辺　健哉（WATANABE KENYA）
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：６０４１９９８４